

日本語の起源とその豊饒 - 印欧語との相似を考える
「とりが鳴く...」

(「21世紀フォーラム」100号) 2005年 12 / 25日刊

私の家の、道をへだててすぐのところに古い幼稚園がある。以前はこの幼稚園に朝のまだ暗いうちから鳴く鶏がいて、そのかん高い声によく起された。秋田県北部の片田舎に育った私は朝の鶏の声をよく聞いたはずだが、鶏は夜明けではなく夜のうちに鳴くものだという事は知らなかった。

万葉集、柿本人麿作歌中に、「東(アヅマ)」にかかる「鶏鳴(とりが鳴く)」(2-199)という枕詞がある。正宗敦夫、『萬葉総索引』ではこの枕詞は九例。その解釈は、『萬葉辞典』(昭和十六年、佐々木信綱編)によれば、「暁に鳥が鳴く意。續柄未詳。(諸説)(1)鶏は夜のあか時になくので明(アカ)にいひかく(賀茂真淵)。(2)鴉のなく音のああと聞こゆるを以てつづく(上田秋成)。(3)鶏が鳴く故に吾夫起きよとの意より東国にかけ(鹿持雅澄)等」といったものだったが、「アヅマの言語が、鶏の鳴くように聞こえるというところから起ったものに相違ない」(大野晋)という説も現われ、現在、岩波古語辞典は「地名『あづま』にかかる。東国のことばがわかりにくく、鶏が鳴くように聞こえたことから」と定義している。この枕詞については拙著『日本語はどこから生まれたか』(ベスト新書)で述べたが、別の観点から考えてみよう。

「鶏鳴」を「とりが鳴く」と読むのは、万葉集に「等里我奈久(安豆麻)」(18-4131)など音仮名表記があるからだ。この歌は、越中アヅマに赴任している家持に越前在の大伴池主が送った戯歌の一つだが、アヅマをばかにした感じはない。一般に「鶏鳴」は、「とりの鳴く」、「とりは鳴く」、「とり鳴く」とも読めるだろう。「鳴くとりの(アヅマ)」という言い方もおかしくはない。「カケ(鶏)は鳴く」と読まれる例(11-2800)もある。2-105歌では、「鶏鳴」を「あかとき(暁)」と読む。助詞のガは私見では助詞ナの転じたものであり、少なくとも「とりノ鳴く」よりは新しいのだが、この枕詞はなぜいつも「とりが鳴く」とだけ読まれ、その意味が「東国のことばがわかりにくく、鶏が鳴くように聞こえる」というのだろうか？

たしかに大野晋の言う通り、「古代の人は、自分の分からない言葉に対して、しばしば、鳥がさえずるようだとか、モズが鳴くようだとかいう比喻を用いた」ことはある。「鳥語」は後漢書にあり、「駮舌(ゲキゼツ)」という表現は孟子がすでに用いた。しかし、盛唐の詩人、岑参(シンジン)の1句に「鶏鳴紫陌曙光寒」(鶏は紫陌に鳴いて曙光寒く)があり、さらに中国詩の始まり『詩経』には「鶏鳴」という言い方がすでにあった。齊風に「鶏鳴」と題され、冒頭が「鶏すでに鳴きぬ」(夜が明けた)と訳されるものが一つ、鄭風に「(女曰)鶏鳴」(女いわく)「とり鳴けり、(朝だ!)」がある。これらの「鶏鳴」は、曙光前の一瞬を指しているのであって、東国人言葉云々、という含意はまったくない。あかつきが東に通じるのは極地を除き世界共通である。柿本人麿はこうした漢詩の通釈を知っていてこの枕詞を作ったのではないか。

ヴェーダ・サンスクリットでは雄鶏を usâ-kala (ウシャカラ) と言う。usâh は「あかつき」という意味であり、語源的にギリシャ語の eôs (暁、東方)、ラテン語の aurora (暁、東方)、さらに英仏語の east, est (東) につながる。「朝 (アサ)」はこの usâh に似ているが、「アサ」の語源は定まっていない。kala はギリシャ語動詞 kalêô (呼ぶ) につながり、usâ-kala は「暁を呼ぶ (鳥)」である。フランス語で「曙光前の一瞬のくらやみ」は au chant du coq または au coq chantant (とりが鳴く時)。昔よく使われたというこの古い田舎風の言い方はまさに詩経の「鶏鳴」である。

三千年以上前の中国、印欧語世界でも「東」を喚起する「とりが鳴く」という美しい表現は日本では奇妙な色彩を帯びてしまった。地方赴任したらできるだけ早く都に戻ることを願った官吏、地方は例外なく中央に憧れを持っていると信じ込んでいた都人、征夷大將軍という用語に何の疑問も抱かず、蝦夷・アイヌは無知な土人と考えた学者。縄文時代の大言語、アイヌ語はこのような環境で生き延びることはできなかった。ユーラシア語を通じ印欧語に通底していた日本語の起源研究はこうしたものを乗り越えねばならない。